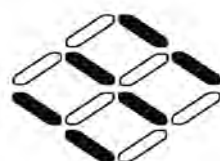


岡山大学疫学・衛生学分野 100周年記念誌

2025年 8 月



岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
疫学・衛生学分野
Department of Epidemiology, Graduate School of Medicine,
Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University

目 次

巻頭言

疫学・衛生学分野100年史

座談会 1

衛生学教室の思い出 Alumniによる特別寄稿 13

新聞に映る衛生学教室——100年の軌跡をたどる—— 77

編集後記 86

巻 頭 言

同門会の先生方におかれましては、ご健勝のこととお喜び申し上げます。

本年は、初代衛生学教授緒方益雄先生が着任されてから100年目の節目の年となります。創設100周年を記念し、当教室に関わってこられた方々から近況などをご報告いただき、100周年記念誌を作成する運びとなりました。お声掛けできなかった先生方も多数いらっしゃると思いますことお許しください。

さて、簡単ではございますが、私自身の自己紹介を兼ね、私と教室の関わり、本教室の現状についてご報告申し上げます。

緒方益雄先生のご尊父であられる緒方正規（まさのり）先生は、東京大学において日本初の衛生学教室を開設された方です。緒方正規先生は熊本県河俣村（現 八代市）ご出身で、私も先生と同郷であり、勝手ながら不思議な縁を感じています。私は2001年に熊本大学を卒業後、岡山医療センターでの小児科研修を経て、2003年より岡山大学大学院衛生学分野博士課程へ進学いたしました。その当時の教授は川上憲人教授で、卒業後、土居弘幸、浜田淳両教授のご着任時には助教を拝命し、さらに環境生命科学研究科の准教授を経て、2019年8月より疫学・衛生学分野の教授を拝命いたしました。

私自身が本教室に関わり始めたのは2003年からと、その長き歴史の一端に触れたに過ぎませんが、諸先生方のご寄稿を拝読しておりますと、改めて教室の輝かしい歩みが深く心に刻まれます。このような記念すべき100周年を迎えるにあたり、これからの教室の発展のために尽力せねばと心引き締まる思いでおります。

教授就任以降、新型コロナウイルス感染症の流行、さらには吉備中央町における有機フッ素化合物問題等、教育・研究活動のみならず、地域社会における様々な課題にも取り組んでまいり、貴重な経験をさせていただいています。その中で、同門の諸先生方始め多くの方より温かいご支援を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

現在、教室では「疫学で人々の暮らしに貢献する」を基本理念とし、スタッフ・大学院生一同、日々研鑽に励んでおります。様々な職種の方が疫学を学びたいと教室の門を叩き、多くの幅広い研究成果を挙げています。そして、医学・公衆衛生の向上に寄与できる人材として羽ばたき活躍してくれています。加えて、岡山県内における公衆衛生ネットワークの構築にも力を注ぎ、社会とともに歩む教室を目指して取り組みを進めております。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜



りますよう、お願い申し上げます。

結びに、現代においてはビッグデータの研究利用やAI等の技術が飛躍的に進展しておりますが、私の師であり、水俣病研究に尽力された故 原田正純先生の「現場を忘れた疫学はきらめきと真実を見失う」という言葉をここに記したいと思います。進歩を遂げる技術は利用しつつも、現場に根差した疫学や研究の重要性を忘れることなく、今後も一步一步、着実に歩みを進めてまいる所存です。

末筆ながら、先生方のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

岡山大学疫学・衛生学分野

教授 頼藤 貴志

疫学・衛生学分野100年史

沿革

明治21（1888）年 第三高等中学校医学部開校に伴い、衛生学が正規講義科目として開講

大正9（1920）年 衛生学教室竣工

大正11（1922）年 岡山医科大学昇格に伴い衛生学教室を新設

大正11（1922）年度－平成12（2000）年度 旧衛生学講座（1925年緒方益雄教授着任）

平成13（2001）年度－平成19（2007）年度 衛生学・予防医学分野

平成20（2008）年度－ 疫学・衛生学分野（現在に至る）

初代 緒方益雄教授（大正14年－昭和32年）

大正14（1925）年6月、細菌学講座と分離した衛生学講座に初めての主任教授として緒方益雄が就任し、名実共に衛生学教室が発足した。

緒方益雄教授時代の重要な研究業績は、血清学、免疫学の分野と環境衛生の分野とに大別できる。従来広く利用されていたUhlenhuth氏法による沈降素測定値が抗体価を示すものではないことを究明した。抗体の特異性、臓器特異性に関しても数々の新しい知見を報告しており、電気泳動法による血清各成分の抗体産生を証明するなど、過敏症の発生機転より抗原抗体の結合を阻止する方策を研究し、飢餓時には過敏症反応が減弱するという事実も解明した。また、日本脳炎委員会の中核となって、本県および近県に流行した日本脳炎ウイルスの新株分離に成功したことは特筆すべきである。

昭和18（1943）年には、第15回日本衛生学会を本学において開催。

昭和29（1954）年、本学に公衆衛生学教室が新設され、当教室の助教授であった大田原一祥が教授に就任した。



第2代 大平昌彦教授（昭和32年－昭和55年）

昭和32（1957）年6月、九州大学医学部公衆衛生学講座より大平昌彦が教授に就任した。

大平教授は、放射線障害とその化学的防禦に関する研究態勢を整え、組織培養法、あるいは動物実験によって、数々の新しい知見を見出した。これら放射線障害のメカニズムに対する実験的な研究に加え、生体現象としての運動負荷と放射線障害との関連についても多数報告し、更に疫学的な研究へと発展させた。三朝地域を中心とするhigh back ground における死産、悪性新生物等の発生頻度とその要因の



疫学研究は、文部省からの研究助成に加え、米国NIHからも研究援助も受けて進められた。昭和42（1967）年以降のスモンの多発に対応した疫学調査を始め、その他数多くの原因不明疾患の疫学調査にも関与した。また、全身性エリテマトーデス、悪性リウマチ、その他の研究班にも参加し、疫学的研究の分野を拡大した。中でも「森永砒素ミルク中毒事件」については、その後の追跡調査による正確な「後遺症」を解明するため、広島大学と合同調査を行い、その成果は被害の実態を明らかにした研究として高く評価されている。

昭和51（1976）年、第49回日本産業衛生学会総会を岡山において主催。特に職業性頸肩腕障害についてはILOのEncyclopedia on Occupational Health and Safetyに初めてOccupational Cervicobrachial Disorderの名称で取り上げられた。

大平教授は「衛生・公衆衛生学の基本は、ヒューマン・エコロジーの見地から人間の健康水準を高める条件を追求することであり、また同時に、大学における学問的存在として理論性を追求するとともに、その基盤に立脚しながら、社会正義の実現のために、実践に役立つ、生きた「衛生学」を発展させること」との理念を掲げ多数の人財を育成。この理念は、後任の青山英康教授に受け継がれ“社会正義の学問体系”として発展し、今日の疫学・衛生学の基本哲学となっている。

第3代 青山英康教授（昭和55年－平成12年）

昭和55（1980）年4月、青山英康が助教授から教授に就任した。Johns Hopkins 大学に留学し、MPH（Master of Public Health）の学位を取得。新しい社会医学分野の「医療倫理学」、「医療経済学」、「プライマリ・ケア」、「地域医療」、「在宅ケア」を日本に根付かせた。



教授就任後、毎年多数の入局者があり、全国の衛生学・公衆衛生学関連講座の中で最大の講座となった。新設医大等の卒業生が教室の卒後臨床研修を希望し多数入局した。門下生から医学部教授が11名、厚労省の局長が4名、国会議員が2名、医学部以外の学部・学科の教授・助教授・講師等の教職員は数十名、厚労省以外の国内外や地方行政機関の行政官が常時数十名活躍するなど、このような状況は全国で例を見ない。厚労省の医系技官の数は岡山大学出身者が多く、その殆どが衛生学の同門であった。また、国際交流の分野では6カ国27名の留学生を受け入れ、帰国後は各自の母国で重要な役割を果たしている。

平成6（1994）年に第67回日本産業衛生学会を、平成10（1998）年に第68回日本衛生学会を岡山で開催した。また、WONCA（World Organization of Family Doctors）や国際疫学会などの国内外で開催された国際学会の組織委員を務めた。更に、日本学術会議－地域医学及び医学教育の会員を1期3年間務めた。

発表した著書は67編（英文10編、和文57編）、学術論文は242編（英文36編、和文206編）、報告

書は46編にのぼる。青山教授は、「森永砒素ミルク中毒事件」の疫学調査・対応策の提言など、社会正義とその質を担保する学問体系を構築した。教え子及びその教え子は今も全世界で多数活躍中である。

第4代 川上憲人教授（平成12年－17年）

平成12（2000）年7月、川上憲人が着任。平成13（2001）年4月には部局化により教室を医歯学総合研究科衛生学・予防医学分野と改称した。

多くの大学院生が入学し、平成17（2005）年時点の大学院生数は26名。在任中には多様な疫学研究を実施し、特に大規模コホートによる職業性ストレスの健康影響、ストレス対策の介入研究が進展した。またWHO・ハーバード大学との共同研究である世界精神保健日本調査を、岡山市を含めた全国11市町村の住民を対象として実施した。これらの研究成果は、JAMAを含む35編の英文原著論文として公表された。

平成17（2005）年8月、国際産業保健学会（ICOH）職場の組織と心理社会的要因科学委員会（WOPS）の第2回国際会議を川上教授が大会長として岡山市で開催。同年、東京大学医学系研究科精神保健学分野に異動。



第5代 土居弘幸教授（平成19年－31年）

土居教授は、厚生技官として保健医療行政、また世界保健機関（WHO本部）Medical Officerとしてポリオ根絶等に従事。平成19（2007）年4月、静岡県理事から着任した。青山名誉教授が重視したEvidence Based Medicine（EBM）の基盤科学である“疫学”を教室の看板として掲げ、平成20（2008）年には分野名を疫学・衛生学分野と改称した。優秀なスタッフ・院生が多数の論文をトップジャーナルに発表するなど、国内では群を抜く実績をあげ、特に疫学理論、環境保健分野では、文字通り世界をリードする人財を育てた。厚生労働省による全国規模の出生児縦断調査を用いた研究で英文20編以上の論文を発表、周産期・小児期における大規模データを活用した疫学研究を推進した。

平成25（2013）年、現有スタッフを中心に公衆衛生学コース（Master of Public Health Course）を開設。医師のみならず、保健師、看護師、管理栄養士、理学療法士など多様な職種の人材を受け入れ、疫学・臨床研究により得られた科学的根拠に基づく保健医療福祉政策の提言とその社会実装を図る専門職の育成に尽力した。在任中、医学博士号取得者とMPHコース修了者を合わせて50名以上を育成し、これらの修了生は行政機関や医療機関、研究機関など様々な分野



で活躍している。青山名誉教授が発展させた、社会正義を貫く教室運営を引き継ぎ、中央省庁等への人財供給の中核としての発展にも寄与した。

第6代 頼藤貴志教授（令和元年～）

頼藤教授は、熊本大学医学部を卒業後、国立病院岡山医療センター小児科での臨床経験を経て、岡山大学疫学・衛生学分野で博士号を取得。同分野助教、環境生命科学研究科准教授を経て、令和元（2019）年、教授に就任。現在に至る。



環境疫学分野、特に大気汚染の健康影響評価において国際的な業績を上げており、また、小児保健に関する先駆的な研究で高い評価を受けている。日本小児科学会学術研究賞、小児医学川野賞など複数の学術賞を受賞。COVID-19パンデミック下では、岡山県クラスター対策班（OCIT）を立ち上げ、その中心メンバーとして科学的知見に基づく感染対策を主導し、岡山県医師会会長賞を受賞した。

さらに、地域社会との連携にも力を注ぎ、瀬戸内国際芸術祭の島民の健康への影響評価をはじめ、COVID-19パンデミックにおける備前市のワクチン抗体価調査や岡山県との協働による小児ワクチン副反応調査、また吉備中央町における環境汚染物質の健康影響評価など、地域の健康課題に即した疫学研究を展開している。

令和7（2025）年現在、博士課程18名、修士課程5名が在籍。「疫学で人々の暮らしに貢献する」というスローガンのもと、環境保健、小児保健分野を中心に研究を展開し、研究成果は国際的に評価の高い学術誌に多数掲載されている。分野内のみならず、岡山大学の臨床分野研究者への疫学的研究支援を実施し、次世代研究者の研究力向上にも尽力している。

歴代教授から受け継いだ疫学・衛生学の伝統である「社会正義の実現」を礎に、研究成果の社会実装を通じて人々の健康増進に寄与している。

注：本内容は岡山大学医学部150年史に掲載された内容を基に作成致しました。

座 談 会

時代を超えて受け継がれる衛生学の精神
－ 100 年の軌跡とこれからへの展望 －

座 談 会

時代を超えて受け継がれる衛生学の精神 －100年の軌跡とこれからへの展望－

参 加 者

頼藤貴志教授（岡山大学 疫学・衛生学分野）

神田秀幸教授（岡山大学 公衆衛生学分野）

谷原真一教授（久留米大学 公衆衛生学講座）

高尾総司准教授（岡山大学 疫学・衛生学分野）



座談会の趣旨

岡山大学疫学・衛生学分野（旧 衛生学講座）は2025年に創設100周年を迎えました。この記念すべき節目に、衛生学講座そして疫学・衛生学分野の歴史を振り返り、その歩みと成果を検証するとともに、次のあらたな時代への展望を語り合う座談会を企画いたしました。

本座談会には、公衆衛生学分野の神田教授、本分野OBの谷原教授にご参加いただきました。全国的に衛生学講座と公衆衛生学講座の統合が進む中、岡山大学では両分野がそれぞれの専門性を活かしながら、併存して独自の発展を遂げてきました。この機会に、両分野の建設的な協力関係の歴史にも光を当て、それぞれの分野が独自の使命を追求しながら、いかに相互補完的に発展してきたかも明らかにしたいと考えております。

黎明期から現代へ：岡山大学衛生学講座の基盤と発展

頼藤：これから、岡山大学疫学・衛生学分野（旧 衛生学講座）創設100周年を記念し、このメンバーで記念対談を実施します。衛生学講座の歴史を振り返るにあたり、岡山大学に限らず日本全体の衛生学の発展についても触れていきたいと思います。まず、衛生学講座初代教授 緒方益雄先生の父、緒方正規先生（東京帝国大学発足時の七人の医科大学教授の一人。東京帝国大学医科大学学長）は、実は私と同じ熊本県八代市出身であったという点があり、歴史的なご縁を感じるところです。

谷原：岡山大学医学部においては、私の知る限り、衛生学が疫学的手法による観察研究、公衆衛生学が実験的手法による研究を中心としていました。日本の医学教育の歴史では、衛生学は明治時代のドイツ医学における細菌学を基礎としており、公衆衛生学は戦後にアメリカで発展した疫学を基礎としています。そのため、岡山大学医学部では長年にわたって、衛

生学と公衆衛生学の役割が入れ替わっていたということになります。これは、衛生学OBの私が現在は久留米大学医学部公衆衛生学講座の教授であることと矛盾しません。

衛生学講座の特筆すべき点は、教授職に限らず、大学外の領域でも多くの人材が活躍してきたことです。厚生省（当時）の局長や衆議院議員など、地方大学の一講座とは思えないほどの多数の人材を中央にも輩出しました。

また、岡大衛生から他にない研究成果や取り組みが数多く生まれています。早くから疫学的手法に基づく観察研究を実施し、森永ヒ素ミルク事件などの社会的な問題に取り組みました。1980年代には既に医療経済学の研究に取り組み、同門の馬場園明先生は健康保険組合のレセプト（診療報酬明細書）データを用いて被保険者自己負担割合と受療行動に関する研究により博士号を取得しました。医学研究のほとんどが実験系研究であった当時において、医療データベース研究の価値を認めておられた青山英康教授はやはり先見の明があったと思います。

高尾：AIやゲノム解析など、誰でも（ちょっと先には）流行ると分かるようなテーマではなく、30年後にその重要性が認められるような研究にいち早く着手していた点は、岡山大学衛生学講座の大きな特徴だったと思います。

谷原：大平昌彦先生は1957年に九州大学から衛生学の第二代教授として着任され、岡山大学衛生学講座の基礎を築かれました。大平先生が教授の時代は、ちょうど学生運動が盛んな時期と重なっていました。大平先生は様々な事情で居場所を失った岡大医学部の卒業生を受け入れ、育てられました。岡大衛生学の基盤形成という意味で、この時代は極めて重要な位置づけにあると言えるでしょう。青山先生が第三代教授であられた時代では様々な分野に多くの人材を輩出し、講座全体が大きく発展しました。今回、改めて振り返りますと、大平先生の時代に衛生学講座に集まってきた人材が青山先生の時代に花開いた、というのがより正確な表現ではないかと考えました。

高尾：青山先生がよく仰っていたのは、大平先生のときは実験系の研究が中心だったのに対し、青山先生の時代に岡山大学で初めて実験ではない研究手法による学位論文で学位を取得させたということです。これは研究方法論の大きな転換点だったと言えるでしょう。

谷原：戦後日本の疫学研究を牽引された重松逸造先生（東京帝国大学医学部医学科卒業後、金沢大学医学部教授、国立公衆衛生院疫学部長、放射線影響研究所理事長などを歴任）と大平先生は同世代です。お二人とも海軍軍医としてラバウルに勤務されたことがあり、交流があったかどうかまでは不明ですが少なくとも面識はあったのではないかと想像しております。戦後の疫学研究の発展は著しく、疫学者の繋がりや現代の衛生学・公衆衛生学分野の研究に大きく影響を与えています。特に循環器疾患の疫学研究は、公衆衛生学分野の神田

先生が以前に所属された研究室（滋賀医科大学）など多くの研究者にその系譜が代々受け継がれています。

一方で、大平先生は後進にご自身の研究テーマを受け継がせると言うよりも、独立独歩で自らの道を切り開いていくことを手助けされたように感じています。当講座は、行政・政治など学術以外の分野で活躍する人材を多く輩出して参りました。最盛期には厚生省（当時）の局長や衆議院議員を複数輩出するなど、その社会的な影響力は広範囲に及びました。また学術については、同門である上畑鉄之丞先生が産業医学の分野で「過労死（Karoshi）」という概念およびその用語を確立したことなど、革新的な研究者を輩出したことでも知られています。

神田：公衆衛生学講座としては、衛生学教室初代教授の緒方益雄先生の息子さんにあたる緒方正名先生が当教室の教授を務めていたという歴史的なつながりがあります。ただ、両講座の発展に伴い、以後の交流が活発ではなかったように伝え聞いています。両講座は、「それぞれ独自に」発展してきた歴史を持つという印象があります。

高尾：加えて、講座名と研究内容、あるいは研究方法の逆転現象は長く続いていました。岡山大学では「衛生学」という名称のもとで実験研究ではなく、疫学研究を担い、場合によってはSMONや森永ヒ素ミルク事件などの社会問題も取り扱い、一方で公衆衛生学講座は実験研究に加えて、生活に密着した課題を取り扱っていたという構図が長く続いたと感じます。今は全国的に衛生学・公衆衛生学講座の統合が進んでいる中で、岡山大学がこの独自路線をどう活かしていくかが焦点でしょう。

谷原：歴史的には、同じ（近い）テーマについて一緒に取り組むというよりも、それぞれの分野が得意な領域を守りながら発展してきました。専門分化が進みながらも、協力すべき時には力を合わせる。そうした柔軟さが両講座の強みであり、組織を存続させた要因ではないでしょうか。

研究室のあり方と研究の展開

高尾：長年にわたり、一般的な衛生学と公衆衛生学の役割とは逆転していましたが、近年になってようやく公衆衛生学は本来の領域へと回帰し、疫学・衛生学もその専門性を保持しながら発展してきました。これまでは観察研究と実験研究という方法論で区別されていたと言うこともできると思いますが、今後は方法論による区別ではなく、取り扱うテーマによって両分野の差異が明確になっていくであろうと考えられます。

谷原：疫学は衛生学・公衆衛生学に共通の方法論であることは疑う余地はありません。しかし、生物統計学、行動経済学などの細分化された領域については、すべてをカバーしている研

究者はおられません。米国の公衆衛生専門職大学院認定基準では、公衆衛生学を5分野（疫学、生物統計学、医療政策・管理学、産業・環境保健学、社会・行動科学）に分類しています。本邦の公衆衛生大学院もこれらを基本5領域として教育カリキュラムを作成しています。最新の医学教育モデルコアカリキュラムも5分野を意識した内容となっています。このため、医学部における卒前教育を一つの講座で担うには教員数は不足しており、充実した教育研究体制の構築が課題となっています。

頼藤：また、現在のAIブームは、医療情報の統合といった分野では進展が見られるものの、疫学などの方法論的な部分では（その役割は）限定的である可能性があります。AIは予測を行うツールであり、仮説なくデータを集めるだけでは実質的な研究にはなり得ません。社会の実態を見据えた研究姿勢が今後も重要であると考えています。

神田：AI技術は便利な面もありますが、根本には生身のデータや現場の肌感覚が不可欠です。人間や生活そのものを見る視点は岡山大学の伝統として大切にされてきたと認識しています。

谷原：「科学」そのものについて深く考察する科学哲学の視点から、医学研究について俯瞰的に捉えることも重要です。私が大学院生の時、津田敏秀先生などが科学哲学の勉強会を開催されていました。個人的なことですが、トーマス・S・クーンによる古典的な名著「科学革命の構造」に記された通常科学とパラダイムシフトに関する知見を得ていなければ、医学研究のほとんどが実験系研究であった当時において、医療データベース研究を私は継続できなかったのではないかと思います。当時は科学哲学を勉強しても実際の研究に関係ないのではないかと考えていましたが、今振り返ると科学哲学を学んだことは大きな意義があったと実感しています。現在のAIは結局のところ、既存の知見を拾い上げることが得意なツールであって、使いこなすには一定の修練が必要という認識が重要であると考えます。ChatGPTなどの現状を見ましても、利用者側の能力によってAIのアウトプットに限界が生じることが認識されています。

頼藤：話を元に戻しますと、今後は両分野間での役割分担がより明確になり、例えばデータや対象領域で住み分けを図ることが一つの方向性として考えられます。しかしながら、医療政策や生物統計学は両分野の守備範囲をあわせたとしても十分にはカバーできていない領域です。

神田：公衆衛生学では慢性疾患を中心に研究を進めており、このような形で専門分化が進むことで、それぞれの強みを活かした研究体制の構築が期待されるのではないのでしょうか。

高尾：両分野がそれぞれ中途半端に多くの領域に手を出すよりも、それぞれの専門領域を明確にして深めていく方が良いかもしれません。データの種類や研究対象領域で分担するという

のも一つの方法ですね。

社会のニーズに応える衛生学

神田：岡山大学では早くからMPH（公衆衛生学修士）コースが設立され、その先見性が評価されています。これにはどのような経緯があったのでしょうか。

高尾：本コースは教員定数確保のための、やや守備的な取り組みとして始まりました。吉良尚平先生（公衆衛生学4代目教授）の時代から構想があり、津田敏秀先生が環境学研究科へ転出され学際的な枠組みが構築できたことも、この流れの一環でした。最終的には教員定数確保という当初の目的は達成できなかったものの、大学院生の確保という点では大きく貢献しています。

谷原：大学院の人气が全般的に低下している状況下において、MPHコースを維持・発展させてきた岡山大学の取り組みは特筆に値すると思います。土居弘幸教授が着任されるまでは、両講座の統合が懸念される時期がありました。

高尾：「この講座は私一人しか教員がいない」と感じるような厳しい状況の中、MPHコースへの注力が講座の存続戦略として機能していたと言えます。川上憲人教授のご退任後、一時的に空白期間がありましたが、土居弘幸先生と浜田淳先生がご着任され、医療政策分野も加わったことで体制が強化されました。今後公衆衛生の5分野を意識しながら再編していくとすれば、各専門領域のバランスをいかに取るかが重要な課題となるでしょう。疫学・衛生学分野が外部連携のハブとしての役割を担うことの重要性も考えられるのではないのでしょうか。

谷原：行政機関との連携におきましては、分野の特性上、衛生学と公衆衛生学がそれぞれの専門性を活かしながら状況に応じて対応することが効果的であると思います。現在の教授選考システムではインパクトファクターなど学術分野で用いられる指標が重視されるため、行政機関など学術以外の領域との連携に長けた人材が選ばれるとは限らないという状況です。このような人材を大学だけで養成することは難しいことから、人事交流を含めた多様な選択肢を検討する必要があると思われます。そうした人事交流の窓口的なポジションも考慮に値するのではないのでしょうか。

神田：それはまさに疫学・衛生学分野が担うべき役割かと思います。誠に素晴らしいご提案だと思います。

高尾：例えば生物統計学などの分野では、ご専門の方との連携も一案ではないのでしょうか。

神田：生物統計学ですね。住み分けを考えるならばそのような方向性も一考の価値があると思います。データサイエンスで知られている滋賀大学や横浜市立大学との連携・協力を仰ぐこ

とは可能かと思います。

頼藤：公衆衛生学と社会とのつながりについてはいかがでしょうか。

神田：社会とのつながりという観点では、慢性疾患、特に生活習慣病やアディクションを中心に取り組んでおります。当講座では大規模データ集団のみならず、小集団や症例を含めた課題ベースの視点で研究を進めております。アディクション研究は本分野の主要テーマの一つであり、アルコールやゲームなど社会的ニーズに応えるべく公衆衛生学研究を進めております。

谷原：時間軸とアプローチ方法には明確な違いがありますので、その点は今後も外部に向けて積極的に情報を開示していくべきであろうと考えます。

頼藤：本日の議論を通じて、社会のニーズも短期的なものと中長期的なものに分かれていることを改めて認識しました。この点においても両分野の適切な住み分けが重要であるということが示唆されます。たとえば疫学・衛生学分野が短期的・緊急的な課題に、公衆衛生学分野が中長期的な課題に取り組むという役割分担も考えられるでしょう。内科で急性疾患と慢性疾患があるように、公衆衛生の課題にも様々な時間軸があります。実際に、この数年間を振り返ると、新型コロナ対応であったり、水道水の問題の対応であったり、喫緊の課題には疫学・衛生学分野が対応してきたということとも整合しています。

神田：内科の急性疾患と慢性疾患の区分に類似した役割分担が、両分野においても認められるかと思います。疫学・衛生学分野の研究が短期的・緊急的な課題のみに特化しているわけではないと思いますが、両分野の対応には時間軸に違いがあると広くご理解頂けるように進めていく必要があるでしょう。

頼藤：フィールドワークの実施状況はいかがでしょう。

神田：はい、本分野では実地調査を多く実施しております。課題を持つフィールドに足を運び計測やインタビューを行う、いわゆる「泥臭い」フィールドワークを重視した研究スタイルを採用しています。

高尾：一方、当分野では大規模データを扱う研究が中心となっており、実地での活動はやや少ない傾向にあります。

頼藤：水俣病に関する調査などにおいては、私が現地での実働を担当しており、フィールドワークを疫学・衛生学分野でも行っています。

これからへの展望

頼藤：これからの衛生学が目指すべき方向性についてはいかがお考えでしょうか。

谷原：私見ではありますが、5分野を意識した役割分担が必要であると考えています。各分野が

それぞれの専門性を高めることによって、より質の高い研究や教育が実現できるものと思われます。私が所属する久留米大学では医療政策、疫学、行動経済学を含む行動科学は公衆衛生学講座が担当しています。生物統計学はバイオ統計センター、産業・環境保健は環境医学講座がそれぞれ独立して対応するという体制を採っています。現状、公衆衛生学講座の所掌範囲がやや広い状況です。岡山大学においても、長期的な視点に立てば頼藤先生がご指摘されたように学内で5分野をカバーできるように多様なリソースを確保する戦略が望ましいと考えます。

頼藤：将来的な展開を考えますと懸念される点もあります。特に医療政策、行動経済学の分野、とりわけ医療政策の専門家が不足しているという現状があります。また、生物統計学の人材も不足しています。更に、近年、コホート研究の立ち上げや各医療機関のデータを統合するといった取り組みが推奨されつつあるようですが、いかがでしょうか。

神田：医療ビッグデータ活用の方向は理解できますが、岡山での新たなコホートの立ち上げは全国の既存コホートとの違いや運用の面で時間や労力がかかり、課題が多いと感じています。現状、岡山での医療ビッグデータ活用の展開は、まず病院データベースの構築を手がけると岡山大学の強みを活かせるのではないかと思います。

谷原：病院データベース連携の議論は頻繁に行われておりますが、基盤整備が不十分な状態での単なるデータ結合は拙速ではないかと懐疑的な見解を持っています。既存データの活用方法に関する理論面も重要です。相談には応じますものの、目的に対応するデータ自体が存在しない場合には分析が困難であることは明白です。既存データを活用した研究手法を学ぶ場として、疫学・衛生学の重要性は今後ますます高まると考えます。

高尾：誰もが流行に追随しやすい研究テーマにばかり偏ることなく、数十年後の評価を見据えた研究に取り組む姿勢が極めて重要であると考えます。我田引水的な見解かもしれませんが、将来的に評価される研究を先駆的に実施することの意義は計り知れないものがあります。

谷原：歴史は繰り返すものです。地道な研究の積み重ねこそが真の価値を生むという点は、今後変わらない真理であると思います。体系的かつ着実に学問を修めることの意義は、これからますます高まっていくのではないかと考えております。

頼藤：先人たちが築いてきた岡山大学の衛生学、そして公衆衛生学の伝統を継承しつつ、新時代の要請に応える研究を推進していくことが、私たちに課せられた使命であると認識しています。若手の皆さんには、専門分野だけではなく、関連分野や社会との関わりを意識して研究や実践を行ってほしいと思います。地道な作業や基礎的な学びこそが、最終的に大きな成果を生み出すことを、100年の歴史が物語っていると考えています。AIやビッグデー

タなど新たな技術などが次々と登場する時代だからこそ、科学的な批判精神と社会や現場への視点を忘れずに、次の100年に向けて歩んでいきたいと思います。

編集後記

本座談会は2025年2月3日に開催されました。100年の歴史を振り返りながら、疫学・衛生学と公衆衛生学の両分野が独自の発展を遂げつつも、相互に補完し合う関係を築いてきたことが浮き彫りになりました。時代の変化に対応しながらも、学問的な批判精神と社会への貢献という基本姿勢を守り続けることの重要性が参加者全員の共通認識となりました。次の100年に向けて、両分野がさらに発展していくことを願っています。なお、文責については対談者である4名にあるものですが、以下のとおりAIによる要約を行ったことで、一部驚き（や笑い）を禁じ得ないような表現への編集がなされていました。細部にわたって確認したつもりではありますが、もしその残りがあった場合にはご容赦いただければ幸いです。

謝 辞

本座談会の記録整理にあたり、香田将英先生には生成AI技術を活用した要約・編集作業にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

座談会を振り返って

岡山大学 疫学・衛生学分野 准教授

高尾 総司

現時点で、講座に所属する教員の中で、一番の古株になってしまった。96年に大学院には入り、大学院生活を謳歌(?)しながらイメージしていた修了後の仕事は独立系産業医だったので、まさか自分が、という思いはいまだにある。

実は最初に、私に割り振られた寄稿文のテーマは、「衛生学100年の歴史を振り返って」であった。しかし、実感を伴って振り返ることができるのは、もっとも遡っても5年次の講義で青山先生の話術に圧倒された95年以降となると、100年間のうちのわずかに30年分ほどについてしか語るができないことに気づいて、「座談会」を振り返ることにしたのである。

そんなことから、創設100周年記念の座談会の企画に際しても、講座の歴史という点では谷原先生に譲る部分もあるが、私が大学院を修了した2000年、あるいは、助手として採用してもらった2001年4月以降の講座のできごとは、おおよそ直接に見てきた、いわば歴史の証人のような立ち位置で参画することとなった。

座談会では、衛生学講座(疫学・衛生学分野)と公衆衛生学講座(公衆衛生学分野)との関係性についての整理を双方の立場から、相応の時間をかけて行った。比較的うまく棲み分けがなされている現状は、おそらく学部学生からみた「戸惑い」の軽減に役立っているのではないか。(現在は4年次に行われる)衛生学講義の最後の感想のなかには、「衛生学と公衆衛生学の違いがわからなかった」という苦情めいたコメントが毎年必ず見受けられていた。この「困惑」は、たぶんに公衆衛生学領域に進もうとする意思意欲に対して、決してプラスに働いてはいなかったと思う。逆にいえば、ここのところ、卒後臨床研修を終えてすぐ美容外科に進む直美(ちょくび)に続いて直産(同様に産業医になる)の一定の人気、同時に日医産業医基礎研修会の受講倍率が7-8倍にもなるような形もふくめた公衆衛生学領域人気から、医学部卒業生の進路の候補のひとつとなっているいま、この両講座の良好な関係性は、たぶんに他大学に対する大きなアドバンテージにもなるのではないかと期待する。具体的に言えば、一つしかなくて「選べない」のではなく、二つあるから「選べる」というメリットだ。

長い歴史があることは良いことではあるが、当然、逆に捕らわれる面もある。今回は、100年を振り返り、良いものは残しつつ、これからの時代にあった衛生学分野として、あらためて考えるよい機会になったように思う。

新聞に映る衛生学教室 ——100年の軌跡をたどる——

はじめに

岡山大学衛生学教室が創設100周年を迎えるにあたり、記念すべきこの節目に何か形に残るものを、と思い立ちました。そこで、これまで当教室が新聞各社にどのように報じられてきたかを振り返り、時代ごとにその足跡をたどってみることにしました。

時代区分は、戦前・昭和（戦後）・平成・令和の四つに分け、それぞれの時代における主な新聞報道を紹介します。

新聞記事の検索には、朝日新聞社のデータベース「朝日新聞クロスサーチ」を主に使用し、「(岡山大 OR 岡大 OR 岡山大学) AND (疫学 OR 衛生学)」などの検索語を調整しながら検索しました。また、一部には読売新聞社の「ヨミダス」も併用しています。

なお、朝日新聞社の1999年（平成11年）以前の記事には縮刷版をもとにしたものも含まれており、古い記事では文字の判読が困難な箇所もありました。筆者の解説に基づく記載も含まれるため、実際の記事と若干異なる場合があることをご了承いただければ幸いです。

また、本稿は学術誌におけるシステマティックレビューのような網羅的調査を目指したものではありません。限られた誌面の中で、衛生学教室が社会にどのように受け止められ、どのように報じられてきたかを概観することを目的としています。

すべての記事を紹介することは叶いませんが、本稿が衛生学教室の歴史を知る一助となり、また、次の100年に向けた歩みの一端を感じていただければ幸いです。

戦前

岡山大学衛生学教室の礎が築かれた大正・昭和初期。博士号の授与や、生活に根ざした研究成果が新聞に取り上げられ、教室の存在が社会に徐々に認知されていった時代です。

1925年（大正14年）12月2日 朝日新聞朝刊7面

「兄弟同時に新博士、緒方博士令息学位授与決定」

緒方益雄先生とそのご兄弟が、同時に博士号を授与されたことが報じられています。当時は博士号の授与自体がまだ珍しく、兄弟そろっての学位授与はさらに稀であったため、新聞で取り上げられたものです。

1936年（昭和11年）4月2日 朝日新聞朝刊2面

辞令（一日）岡山医科大学教授 緒方益雄

緒方益雄先生が岡山医科大学教授に就任されたことが簡潔に報じられています。なお、この年には二・二六事件が発生しており、同じ紙面では「極東赤軍二万に対応 我が在満兵力を充実」といった緊迫した国際情勢も大きく報道されていました。

1937年（昭和12年）12月6日 朝日新聞朝刊4面

「科学／二重戸の室内保温、一定間隔が必要 ガラス・障子の作用に新研究」

日本家屋の保温性向上を目指して、岡山医大の衛生学教室で行われた研究成果が紹介されています。ガラス戸と障子の効果的な配置に関する実験結果が報じられており、当時の生活に密着した研究テーマであったことがうかがえます。

昭和（戦後）

戦後復興から高度経済成長にかけて、社会が大きく変化する中、衛生学教室は感染症、公害、労働衛生など多様な課題に取り組みました。新聞記事には、その歩みと社会への関わりが記録されています。

1969年（昭和44年）10月21日 朝日新聞朝刊14面

スモンは感染症？ 岡山大の公衆衛生学 緒方正名教授（衛生学初代教授 緒方益雄先生のご子息） 公衆衛生学会で報告

患者の発症状況から、スモン病はウイルス感染症ではないかという仮説を発表されたことが報じられています。現在では薬害による疾患であることが判明していますが、当時は限られた情報の中で原因を探る手探りの調査が続けられていたことがうかがえます。



昭和40年辺りに図表で使っていた雲形定規

1969年（昭和44年）10月29日 朝日新聞朝刊15面

学会に私服警官 事務局が呼んで紛糾／岡山

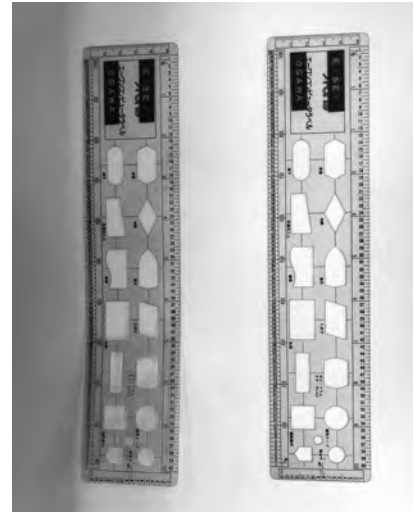
第27回日本公衆衛生学会総会において、若手研究者たちが「赤木五郎学会長の辞任」を要求し、会場に私服警官が入っていたことが発覚して大きな抗議活動に発展した様子が報じられています。この抗議を行った若手研究者の一人として、青山英康先生のお名前と主張内容が記載されています。

1970年（昭和45年）10月12日 読売新聞朝刊14面

胃炎などへのキノホルム スモン発病原因？ 岡山大調査

岡山大学衛生学教室（大平昌彦先生）による疫学調査の結果が報じられています。岡山県真庭郡湯原町のスモン病患者を対象とした調査で、キノホルムとの関連が示唆されました。

前年の記事では感染症説が有力でしたが、1970年9月に新潟大学から薬害説が発表されたことを受け、再検討が進められた経緯がわかります。



「テンプレート フローチャート ロジック定規」で、青山先生が「NEAC」アSEMBラーのプログラム作成の際に使用された。

1976年（昭和51年）8月7日 朝日新聞朝刊19面

緒方益雄先生の訃報が報じられています。

1979年（昭和54年）11月18日 読売新聞朝刊14面

潜在患者34人を確認 ヒ素ミルク疫学調査

岡山大学衛生学教室（大平昌彦先生）が広島県安芸郡瀬野川町で実施したヒ素ミルク事件に関する疫学調査の結果が報じられています。事件から時間が経過しても、なお健康被害の影響が続いていることを示しています。

1982年（昭和57年）10月1日 朝日新聞朝刊22面

「大東マンガン訴訟」判決

「官産の癒着を断つ」と題する記事の中で、青山英康先生の見解が紹介されています。産業と行政の癒着を断ち切るべきとの強い主張が、時代背景とともに伝わってきます。

1986年（昭和61年）4月3日 朝日新聞朝刊3面

「VDT作業の女性、2倍近い出産異常 自治労顧問医調査」

コンピューター作業（VDT作業）を行う女性の出産異常リスクについて、青山英康先生が「労働形態の変化が母体へのストレスを増大させた可能性がある」との見解を示されています。電磁波による影響を疑う声に対し、慎重な立場を取った発言でした。

1987年（昭和62年）10月14日 朝日新聞朝刊2面

新潟のヒ素中毒、28年後の今も 疫学調査で判明、学会発表へ

津田敏秀先生による疫学調査で、新潟の慢性ヒ素中毒による肺がん死亡率が通常の15倍にも達していることが明らかになり、報じられています。昭和34年に発覚した公害事件の長期的影響が、改めて浮き彫りにされています。

1988年（昭和63年）12月17日 朝日新聞朝刊2面

給食調理員の「指曲がり症」、公務災害認定をきょう申し立て

中桐伸五先生による調査に基づき、給食調理員における「指曲がり症」の発症リスクが高いことが明らかになり、公務災害認定を求める動きが報じられています。現場労働者の健康問題に対する公的な補償の必要性が示唆されています。



振動病についてのDVD

平成

バブル崩壊後の社会変動期に、衛生学教室は地域医療や保健政策への貢献を強めました。新聞各紙には、教室の実践や提言活動が数多く紹介されています。

1993年（平成5年）3月9日 朝日新聞夕刊2面

六価クロムの影響検診廃止へ 「健康被害なかった」

六価クロムによる健康影響について、「被害はなかった」とされ、検診事業の廃止が決まったことが報じられています。しかし、慎重な見解もあり、青山英康先生による「なお影響は否定できない」とするコメントが掲載されています。このため、検診に代わり健康相談事業が開始され、六価クロムのモニタリングも継続されています。

1995年（平成7年）12月12日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

呼びかけ人15人中党员8人 新党の代表会議発足 社
党県本部／岡山

大平昌彦先生が呼びかけ人の一人として名を連ねた
ことが報じられています。



Windows95を使っていた際の思い出
5インチのフロッピーディスク

1996年（平成8年）10月1日 朝日新聞朝刊オピニオン欄

「保健所長は医師に限る」か 地方分権委の廃止提言
に論議」

地方分権推進委員会による提言に対し、青山英康先生が廃止反対の立場から見解を述べられています。なお、記事中で「公衆衛生学」と紹介されていますが、記者が衛生学と公衆衛生学の違いを正確に把握していなかった可能性も考えられます。

1997年（平成9年）9月26日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

「倉敷市保健所」設置の懇談会、市移管めざし初会合／岡山

倉敷市が保健所設置に向けて懇談会を設置し、その会長に青山英康先生が選任されたことが報じられています。

2003年（平成15年）3月1日 朝日新聞朝刊（高知地方欄）

学長選、青山英康氏を信任 高知女子大／高知

高知女子大学の学長選挙において、青山英康先生が信任されました。有効投票数86票のうち、83票という高い信任を得たことが伝えられています。



小河先生のお母さまに贈呈された青山先生のご著書
右端のポインターは青山先生が海外出張の際にお土産
として持参され、当時はその機能性に大変喜ばれた。

2007年（平成19年）2月3日 朝日新聞朝刊（高知県地方欄）

高知女子大の青山学長、今期で退任 再選の声にも「新しい人に」／高知県

青山英康先生が、再選を望む声があったにもかかわらず、任期満了での退任を決意されたことが報じられています。教職員へのメールで、「新たな学長のもと、さらなる改革と発展を」と期待を寄せられたことも紹介されています。

2007年（平成19年）9月6日 朝日新聞読売朝刊21面

【うつノート・変わる常識】（8）10年で患者2倍（連載）

うつ病に関する連載記事の中で、川上憲人先生が実施した全国調査が紹介されています。うつ病患者数の増加傾向が示され、社会的関心の高まりがうかがえます。

2011年（平成23年）12月13日 読売新聞朝刊（広島地方欄）

「黒い雨」作業部会 結論先送り＝広島

原爆投下後に降った「黒い雨」に関する厚生労働省検討会で、川上憲人先生が「サンプル数が少なく、比較が難しい」とコメントされている様子が報じられています。

2012年（平成24年）3月31日 朝日新聞朝刊（広島地方欄）

（週刊お年寄り）予告編 老後を生きるヒント探る 長寿の町に地域の力／中国・共通

「日本人の長寿の秘密」に関する取材記事において、イチロー・カワチ先生とともに土居弘幸先生のコメントも掲載されています。いずれのコメントでもソーシャルキャピタルの重要性を指摘しています。

2012年（平成24年）4月11日 朝日新聞朝刊2面

早期死亡リスク、地域差拡大 都道府県別、最大1.6倍 岡山大助教ら調査 【大阪】

都道府県間の早期死亡リスク格差が拡大していることを示した、鈴木越治先生らの調査結果が報じられています。図表や論文情報も掲載されており、記者の科学リテラシーの高さもうかがえます。

2012年（平成24年）10月29日 朝日新聞朝刊4面

（防災 復興）人手不足補う県外医師 若手や中堅、被災3県の現場で奮闘

震災と原発事故の影響による医師不足の中、被災地支援に尽力する医師たちについて、土居弘幸先生のコメントが掲載されています。

2016年（平成28年）10月26日 朝日新聞朝刊（福島地方欄）

偽資格証「総数覚えてない」「発覚を恐れデータ消去」 除染教育不正／福島県

福島第一原発の除染作業に関する不正問題について、津田敏秀先生のコメントが掲載されています。作業員への適切な教育がなされていなかった実態が浮き彫りにされています。

令和

新型コロナウイルスのパンデミックやPFAS問題など、未曾有の課題に直面する中、衛生学教室は科学的根拠に基づく調査と社会への発信を続けています。新聞報道を通じ、その取り組みの一端が記録されています。

新型コロナパンデミック

私が検索した範囲では、2021年4月から2023年2月の期間に、衛生学教室に関連する新型コロナウイルスに関する新聞記事が確認できました（検索方法によっては、他にも記事が存在する可能性があります）。内容は、パンデミック拡大への注意喚起やワクチン副反応に関する報道が中心でした。

2021年（令和3年）4月28日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

（新型コロナ）第4波、いまが正念場 県の専門家チーム、頼藤貴志・岡大院教授に聞く／岡山県

岡山県内で新型コロナウイルス感染が急拡大する中、頼藤貴志先生が最大限の警戒を呼びかけられたインタビュー記事です。本記事は、現時点で確認できた中では、衛生学教室に関連する新型コロナ報道の最初の記事にあたります。



太田武夫先生のデザインされたアマビエの切手

2021年（令和3年）8月24日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

接種副反応、発熱23% 岡大が1回目4000人調査 コロナワクチン／岡山県

新型コロナワクチン1回目接種後の副反応について、岡山大学が約4000人を対象に調査した結果が中間報告として発表されました。頼藤貴志先生のコメントも紹介されています。これも、現時点で確認できた範囲では、衛生学教室に関連するワクチン副反応調査の最初の記事です。

2023年（令和5年）2月24日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

乳幼児の副反応、少ない傾向 コロナワクチン接種、成人と比較 県など／岡山県

乳幼児向けの新型コロナワクチン接種後の副反応について、岡山県などがまとめた中間報告が紹介されています。頼藤貴志先生のコメントも掲載されており、現時点で確認できた範囲では、衛生学教室に関連する新型コロナ報道の最新の記事となっています。

PFAS

2023年秋以降は、吉備中央町のPFAS関連の記事の中で岡山大・衛生学に関連する記事が報じられています。

2023年（令和5年）11月18日 朝日新聞朝刊（岡山地方欄）

有識者委が初会合 吉備中央PFAS問題／岡山県

11月17日に開催された健康影響対策のための外部有識者委員会について報じられています。委員長に頼藤貴志先生、副委員長に岩瀬敏秀先生が選出されたことが紹介されています。

2025年（令和7年）2月17日 朝日新聞朝刊2面

給水地区の住民、血中濃度が突出 岡山・吉備中央、PFAS説明会 【大阪】

吉備中央町で実施された公費によるPFAS血中濃度検査と住民説明会について報じられています。この説明会での頼藤貴志先生のコメントが取り上げられています。

おわりに

本稿では、岡山大学衛生学教室が社会の中でどのように報じられてきたかを、新聞記事を手がかりに振り返りました。100年にわたる歩みを、時代ごとの社会背景や教室の活動と重ね合わせることで、当教室の存在がいかに社会と関わってきたか、その一端を紹介できたのではないかと思います。

本稿は、あくまで限られた紙幅の中での概観にすぎませんが、教室の歴史をひもとく一助として、また次の100年に向けた歩みを考える手がかりとして、役立てていただければ幸いです。

そして、願わくは——

本稿が、将来の200周年、300周年といったさらなる節目の折にも、再び手に取られ、またその時代に周年誌を編纂される方々が、この試みを引き継ぎ、未来へとつないでくださることを、心

から願ってやみません。



かつて利用された英国式皮下脂肪計（ハーペンデン）アームを用いて皮膚を挟み、その際の圧力で皮下脂肪の厚みを計測する。なお、測定される側は痛い。



『あらくさ』とは、常に新しい分野や問題に挑戦し続けなければならない社会医学系の教室の宿命として、どのような苦境に立たされても力強く活動をし続けることを同門として誓い合う言葉として採用された、同門会誌名である。大平先生、青山先生の開講10周年、及び青山先生の退官を記念して、『あらくさ』『あらくさー2号』『あらくさー3号』が刊行された。

岡山大学 学術研究院医療開発領域
新医療研究開発センター 助教

三橋 利晴（みつはし としはる）

2004年4月～2012年3月 博士課程

編集後記

100周年記念誌の編纂に携わる中で、幾度となく“時の厚み”に触れました。頼藤教授と共に公衆衛生学分野の神田教授のもとを訪ね、初代・緒方益雄教授に関連する資料を見せていただきました。神田先生のご厚意で開けたブリキ箱には、『防空壕／衛生学教室』と記された木札のついた鍵とともに、緒方先生の写真をはじめとする貴重な資料が整然と収められていました。古い紙の匂いと金属の冷たさに、研究の灯を守り抜こうとした先人の覚悟が伝わってくるようでした。

小児科医として臨床に立ちながら「論文を批判的に読む力」を求めて、疫学・衛生学分野の門を叩いたのは8年前。今では*population health*の視点で地域と世界を見渡し、研究と実践をつなぐ橋渡しに関われることに大きな喜びを感じています。本誌編集は、その歩みをもう一度、自分の足で辿る旅でもありました。

座談会では、衛生学講座と公衆衛生学講座が互いの強みを活かしながら補完し合ってきた100年の軌跡が浮き彫りになりました。AIやビッグデータが台頭する今こそ、仮説を立て検証する疫学の王道と「社会正義の実現」という理念が、これからの羅針盤になると感じます。

寄稿原稿と写真をご提供くださった卒業生・教職員・関係者の皆様、座談会でお話くださった頼藤先生、神田先生、谷原先生、高尾先生に心より御礼申し上げます。小河孝則先生から寄せられた豊富な資料からは、受け継がれてきた教育・研究への志を強く感じました。また、校閲や資料収集に奔走してくださった秘書の岡さん、技術補佐員の入江さんの尽力なくして本誌は完成し得ませんでした。

本記念誌が、教室の歩みを振り返るだけでなく、地域と社会の健康づくりを前進させる小さな推進力になれば幸いです。私自身も研究と臨床を往復しながら、次の100年へ向けてページを紡ぎ続けたいと思います。

2025年8月 吉日

100周年記念誌編集担当
疫学・衛生学分野 助教

松本 尚美（まつもと なおみ）

2016年4月～2020年3月 大学院生



2025年4月21日 松本撮影

岡山大学疫学・衛生学分野
100周年記念誌

2025年8月24日 発行

編集・発行 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
疫学・衛生学分野
〒700-8558 岡山市北区鹿田町 2-5-1
Tel: 086-235-7173

印刷 友野印刷株式会社
